

慢性疾患をもつ青年が捉えるソーシャル・サポートの意味

2階東病棟

武市 光世

I. 研究目的

本研究は慢性疾患をもつ青年が、ソーシャル・サポートをどのように意味づけしているのかを明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

外来通院中の慢性疾患をもつ青年を対象とした。研究への協力の同意が得られた青年に対して、研究者が作成した半構成インタビューガイドを用いて面接調査を実施した。

データ収集期間は平成12年5月～10月で、面接内容はテープに録音して逐語記録を行い、質的・帰納的に分析した。

III. 結果

1. 対象者の特徴

対象者は中学生7名、高校生7名の14名で、性別は男子8名、女子6名であった。平均発病年齢は10.8歳であった。

2. 慢性疾患をもつ青年が捉えたソーシャル・サポートの意味

データを分析した結果、慢性疾患をもつ青年はソーシャル・サポートを表1のように意味づけていた。

全ての青年はソーシャル・サポートを、自己の『病状の安定を図るもの』『自分の居場所を保つもの』として意味づけていた。また7名は、病気をもつ自分を分かってくれるという『情緒的安定をもたらすもの』として意味づけていた。病気とともに生きる中で親から自立し、療養行動に取り組んでいこうとする青年は、『自己管理能力を高めるもの』『療養生活上の力となるもの』として意味づけ、このうち1名は、ソーシャル・サポートを最大限に活用する『病気と共に生きるための糧となるもの』として意味づけていた。病状が安定している、あるいは現在のサポートに満足している青年にとって、ソーシャル・サポートは『今の生活を維持するもの』となっていた。一方でサポートが不適切あるいは不十分な場合は、『居場所を脅かす恐れがあるもの』『葛藤を引き起こすもの』『不確かなもの』と意味づけていた。

表1 ソーシャル・サポートの意味づけ

- | |
|--------------------|
| *病状の安定を図るもの |
| *自分の居場所を保つもの |
| *情緒的安定をもたらすもの |
| *自己管理能力を高めるもの |
| *療養生活上の力となるもの |
| *病気と共に生きるための糧となるもの |
| *今の生活を維持するもの |
| *居場所を脅かす恐れがあるもの |
| *葛藤を引き起こすもの |
| *不確かなもの |

IV. 考察

本研究から慢性疾患をもつ青年のソーシャル・サポートの意味づけが抽出された。これらは慢性疾患を持ちながらも親から自立し、主に仲間関係を通して自我同一性を確立するという発達課題に取り組んでいる青年の発達的特徴を反映した意味づけであると考えられる(Erickson)。青年にとって“居場所”の存在は、青年が自分らしさを保ち、家族や仲間集団への帰属感および自己の正常性を認識する上で大切なものである。一方で親からの自立を図り、仲間関係や学校生活の中で可能な限り自分に適した療養生活に取り組んでいる青年にとって、過剰あるいは不必要なサポートは自立への脅かしとなると共に、居場所を脅かすことになる。青年の療養行動への主体性を支持し、青年が積極的・選択的にサポートを活用できると同時に、青年の居場所を保つ支援体制を整える必要があろう。

〔平成12年12月15日～16日、東京都千代田区にて開催の第20回日本看護科学学会学術集会で発表〕